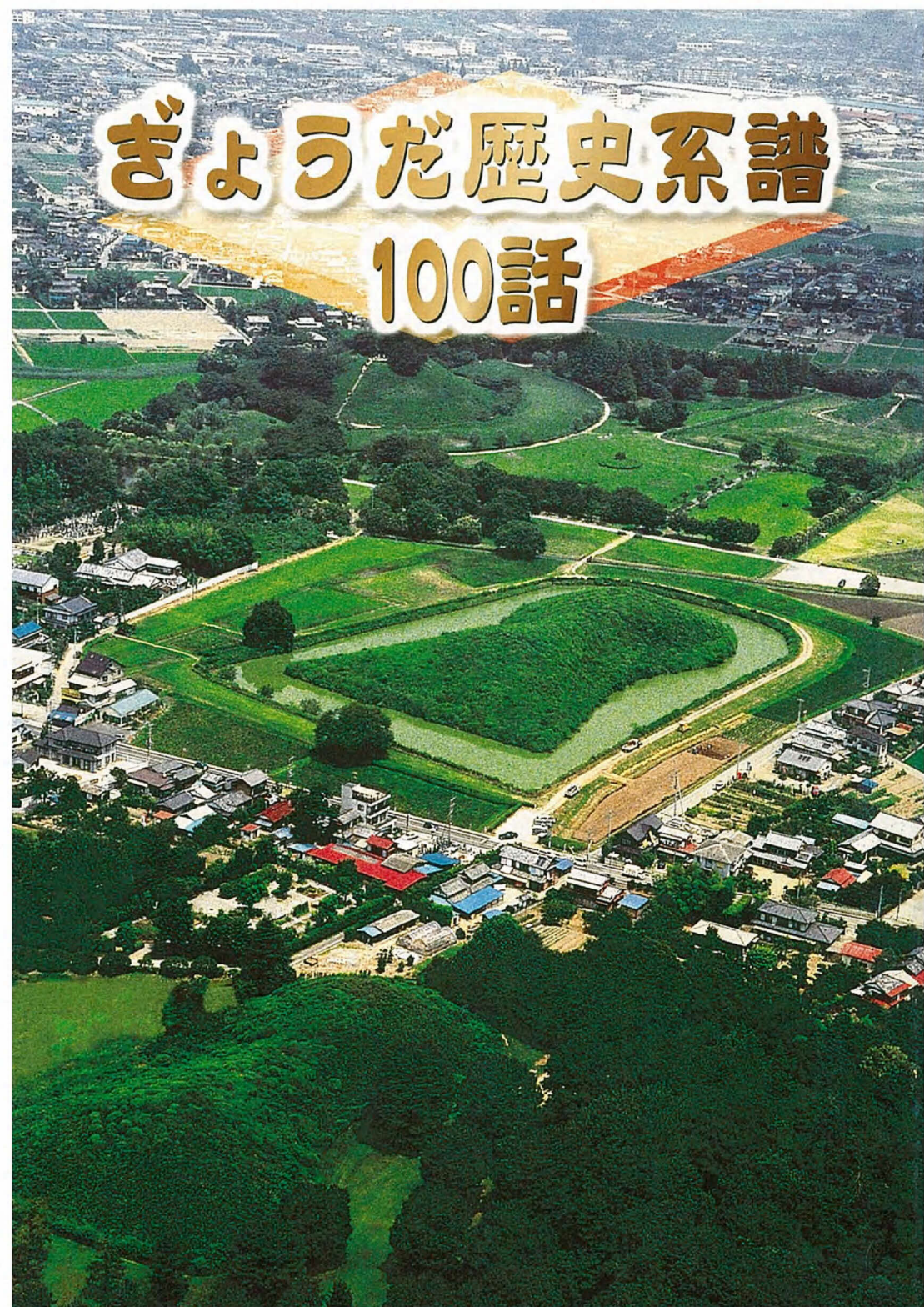


ぎょうだ歴史系譜 100話



行田の古代

埼玉の津に居る船の風をいたみ

綱は絶ゆとも言な絶えそね

(万葉集)

行田は古代から人々が暮らし

政治・文化の中心地であり

埼玉県名発祥の地と言われています。

至元年七月中記乎獲居臣上祖名意冒比塊其兒多加利呈

尾其兒名互已加利獲居其兒名多加獲次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半互比



国宝 金錯銘鉄剣

(稲荷山古墳出土)



其兒名加菟狹余其兒名乎獲居臣世為村刀人首奉事未至今

獲加多古鹵大王寺在斯鬼宮時吾在治天下令作此百鎮利刀記吾奉事祖也



関東の石舞台といわれている八幡山古墳(埼玉県指定史跡)



発掘された馬の埴輪(酒巻14号墳出土・埼玉県指定文化財)

行田の神々

前玉神社の祭神コノハナサクヤヒメが
産屋に火を放ち海幸彦と山幸彦を生んだという
神話をもとにしたさきたま火祭りが
毎年5月4日に行われます。



さきたま火祭り



行田の人物志

忍城は室町時代、成田下総守顕泰により
築城されたと伝えられています。
戦国、江戸から明治維新まで
忍藩十萬石の要として栄えました。



徳川家康肖像画
(埼玉県指定文化財)



(バック・関ヶ原合戦図屏風)

黒糸威二枚胴具足

(松平忠明着用 埼玉県指定文化財)



ごあいさつ



行田市長
山口 治郎

私たちのまち行田市は、利根川と荒川の二大河川を擁した肥沃な土地に恵まれ、古くから人の営みが見られました。国宝「金錯銘鉄剣」が出土した、埼玉古墳群が物語るように、古代から政治、文化の中心であり、埼玉県名発祥の地といわれています。

また、中世には、忍城が築城され、江戸時代は忍藩十万石の城下町として、さらには足袋の産地として全国にその名を知られるなど、常に県北における産業、経済、文化の中心的な役割を果たしながら発展を続けて参りました。

この度、刊行する「ぎょうだ歴史系譜一〇〇話」は市報ぎょうだ平成六年四月号から平成一四年七月号までに掲載した歴史系譜を再編し、まとめたもので、行田に残る貴重な文化財や史跡、また偉大な先人の功績などを分かりやすく紹介しています。

この冊子が、市民の皆様にあふるさと行田の歴史・文化を紐解く身近なガイドブックとしてまた、郷土の歴史を学ぶ入門書としてご活用いただければ幸いです。



目次

一、行田の古代

ごあいさつ（行田市長 山口 治郎）

一、行田の古代

二、行田の神々

三、行田の人物志

あとがき（斎藤 国夫）



高山古墳（真名板）	2	丸墓山古墳（埼玉）	19
八幡山古墳（若小玉）	3	二子山古墳（埼玉）	20
丸墓山古墳（埼玉）	4	小円墳群（埼玉）	21
遍照院（駒形）	5	鉄砲山古墳（埼玉）	22
聖徳太子考養像		將軍山古墳（埼玉）	23
（天洲寺・荒木）	6	瓦塚古墳（埼玉）	24
地藏塚古墳（藤原町）	7	愛宕山古墳（埼玉）	25
水鳥出土地（埼玉）	8	奥の山古墳（埼玉）	26
真観寺古墳（小見）	9	中の山古墳（埼玉）	27
酒卷十四号墳（酒卷）	10	戸場口山古墳（埼玉）	28
酒卷十四号墳（酒卷）	11	白山古墳（長野）	29
酒卷十四号墳（酒卷）	12	浅間塚（埼玉）	30
酒卷十四号墳（酒卷）	13	前玉神社（埼玉）	31
墓前祭祀（酒卷八号墳）	15	小崎沼（埼玉）	32
馬形埴輪（酒卷一号墳）	16	小崎沼（埼玉）	33
大日塚古墳（佐間）	17	小崎沼（埼玉）	34
稻荷山古墳（埼玉）	18	八幡山古墳公園（藤原町）	35

二、行田の神々

前玉神社 (埼玉)	38	治子神社 (下中条)	54
前玉神社 (埼玉)	39	八幡神社 (酒巻)	55
行田八幡神社 (行田)	40	十二所神社 (北河原)	56
諏訪神社 (忍)	41	劍神社 (斎条)	57
二ノ丸稲荷 (忍)	42	五所神社 (白川戸)	58
東照宮 (忍)	43	勝呂神社 (若小玉)	59
久伊豆神社 (桜町)	44	八坂神社 (下須戸)	60
久伊豆神社大雷神社合殿 (皿尾)	45	藤間神社 (藤間)	61
大宮神社 (持田)	46	日枝神社 (小針)	62
愛宕神社 (行田)	47	宇賀神社 (埼玉)	63
愛宕神社 (忍)	48	伊奈利神社 (利田)	64
天神社 (佐間)	49	常世岐姫神社 (渡柳)	65
天満天神社 (荒木)	50	下忍神社 (下忍)	66
春日神社 (谷郷)	51	鷺栖神社 (門井町)	67
子安神社 (下池守)	52		
熊野神社 (須加)	53		



三、行田の人物志

芳川波山	87	大澤龍次郎	105
松平忠誠	86	村上義之助	104
松平忠国	85	村越三千男	103
松平忠堯	84	林頼三郎	102
松平忠明	83	江草斧太郎	101
中野鍼的	82	篠原 叶	100
高久隆古	81	太田玉茗	99
阿部忠秋	80	小林秀三	98
松平信綱	79	石島雄子郎	97
松平忠吉	78	川島奇北	96
松平家忠	77	松岡三五郎	95
成田氏長	76	湯本義憲	94
成田長泰	75	小山健三	93
河原兄弟	74	小川一真	92
円澄	73	植田養山	91
等母麻呂・刀自売夫妻	72	吉田庸徳	90
高橋虫麻呂	71	田中算翁	89
ヲワケ	70	黒沢翁満	88

行田の古代



高山古墳

（真名板）

第1話



古墳が沈む

薬師堂の境内にある高山古墳は、六世紀後半頃につくられた百メートル級の前方後円墳で、保存状態が良く埼玉県の指定文化財になっています。

この古墳は、埼玉大学の堀口先生の指導により市の教育委員会が調査した結果、つくられてから年間で約二ミリ、これまでに三メートル近く沈んでいると考えられるようになりました。

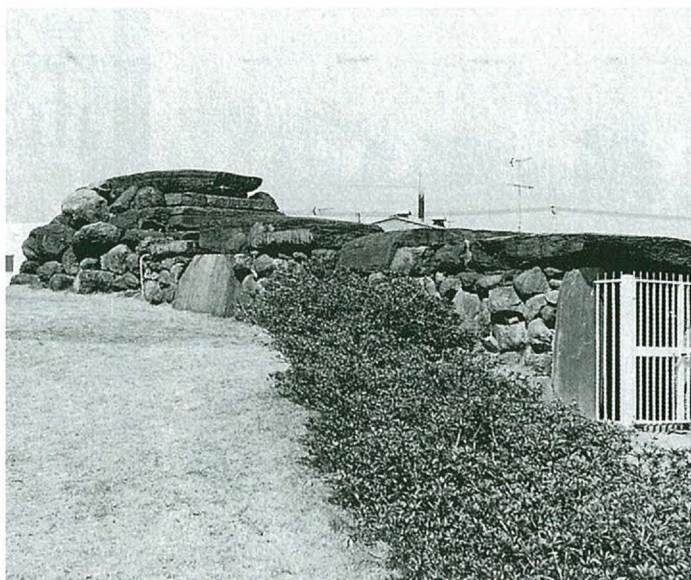
ではなぜ古墳は沈むのか。行田周辺の利根川の右岸地域は大きく見れば関東平野の真ん中で、ここが沈んで周囲の山が盛り上がる「関東造盆地運動」と呼ばれる地殻運動の影響を受けているためだといわれます。古墳がつかわれている地面そのものが沈み、そこに河川の洪水などで土が積もり少しずつ古墳を埋めていく。その結果、古墳が地面の下に沈んでいくことになったのです。

こうした沈む古墳は他にも酒巻・須加地区から羽生・加須方面に続いて見られ、水田の下から古墳が発見されるという全国的にみても極めて珍しい現象を生みだしています。

八幡山古墳

(若小玉)

第2話



聖徳太子ゆかりの人？

富士見工業団地の中に巨大な石室が残っており、関東の石舞台といわれています。

古墳に埋葬された人は、普通わからないことが多いものです。なぜなら、今は墓石に名前を刻みますが、そうした墓誌名が残されていないからです。

石室を復元する前の調査で、漆塗りの木棺の破片が発見されています。この漆塗りの棺は当時貴族や皇族の棺として用いられた例が多く、この棺に埋葬された人物が誰なのか大きなナゾになっています。

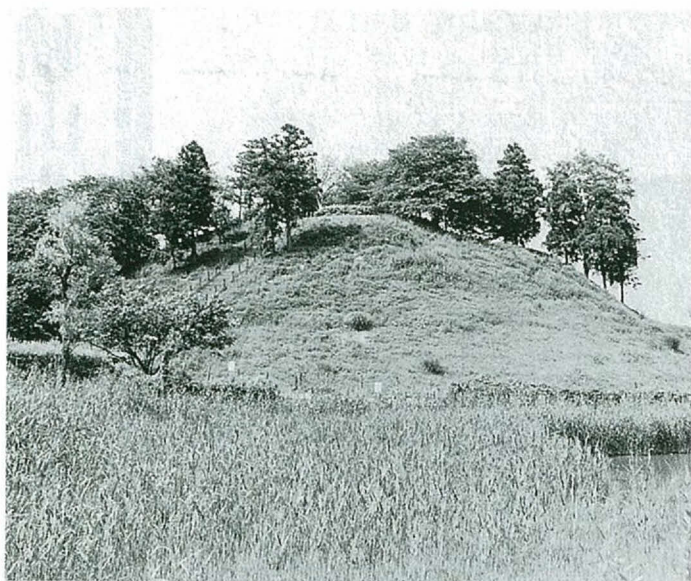
平安時代に書かれた聖徳太子の伝記に、『聖徳太子伝暦』があります。これによれば、聖徳太子に仕えていた物部連兄麻呂という人物が、六三三年に武蔵国造になったといえます。

兄麻呂が武蔵国造として何年間活躍したかは不明ですが、彼がこの地でやがて没したとしたら、七世紀中頃が考えられます。その頃作られた古墳の中で武蔵国造であった彼にふさわしい古墳は、八幡山古墳ではないかとする考え方があります。さてどうでしょうか。

丸墓山古墳

まるはかやまこふん
(埼玉)

第3話



再び聖徳太子の話

荒木の天洲寺にある聖徳太子孝養立像は全国的にも古い時期の作品で、今でもたくさんの人々の信仰を集めています。行田にも太子にまつわる伝説があります。

丸墓山古墳のふもとにあった寺に伝わる話で江戸時代にかかれた『忍名所図会』に紹介されています。

太子に仕えていた調子磨が太子の遺言により太子の遺骨を首にかけて埋葬の地を求めていくと、今の丸墓山古墳の所で急に重たくなり持ち上げられなくなった。ここが太子の希望する場所と思い遺骨を納め堂を建て地藏院という名の寺とした。

後に太子の子供の山背大兄王が蘇我入鹿のために滅ぼされると大兄王の遺骨を太子の墓に一緒に埋葬し、寺の名前も西行寺に改めたという。

この大兄王の霊は西を指して飛び去ったが、彼の墓が磨墓と呼ばれたのは調子磨が建てたからだといえます。

マロ墓がのちにマル墓（丸墓）になったようですが、名前の由来に関する話です。

遍照院

(駒形)

第4話



秀衡ゆかりの薬師様

聖徳太子伝説と似た話を『忍名所図会』からも一つ。

南小学校の隣りにある遍照院の薬師如来は、もともと NHK の大河ドラマ「炎立つ」でも紹介された奥州平泉の藤原秀衡の守り本尊でした。

ある時、目の病をたちまちのうちになおしてくれたお礼に新しいお堂を建てたいと思ったところ、夢枕に薬師如来が現れ、忍に行きたいとお告げがあり、そこで牛に引かせた御輿に乗せ家臣に送らせた。

忍の遍照院に宿をとったところ、その夜にわか牛が落命し、家臣と住職の夢枕に薬師如来が現れ、ここがご縁の地であるとお告げがあった。そこで薬師如来を安置し、死んだ牛は薬師堂の南に埋め松を植えた。これを聞いた秀衡は次々に堂を建て立派なお寺にしたという。この建物は忍城水攻めのとき焼かれてしまったが、後に再建され江戸時代には目の薬師様として多くの人々で賑わったそうです。

遠くからきたこと。にわか出来事で場所が指定されるなど、太子伝説とよく似た構成の話です。

聖徳太子孝養像 (天洲寺・荒木)

第5話



木造聖徳太子孝養立像（国指定文化財）

日本最古の孝養像

太子に関する話の最後に、この孝養像を紹介します。

この像の姿は、太子が一六歳の折、父、用明天皇の病氣回復を祈願して孝養をつくす様子を表現したものといわれ、運慶様の特徴をよく残します。

像内に書かれた銘文によれば、鎌倉幕府の政所別当の大江広元の四男、毛利季光が両親と三代執権北条泰時などの極楽往生を祈って、寛元五年（一二四七）、仏師慶禪に鎌倉で造らせたことがわかります。季光は、父から毛利莊を譲られ、毛利氏を名乗り、

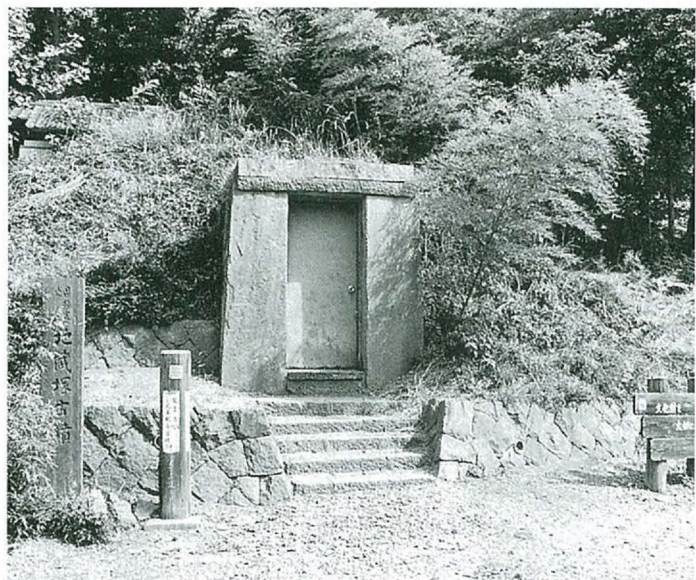
後に中国地方に一大勢力を築いた毛利氏の祖となつた人です。また、季光は執権北条泰時に重く用いられ、幕府の中心で活躍しますが、自分を引き立ててくれた泰時が一二四二年に亡くなります。この泰時や自分の両親などのために造つたのがこの像で、まさに彼の絶頂期のことでした。

鎌倉時代になると太子信仰が盛んになり、太子像がたくさん造られますが、中でもこの像は最も優れ、造られた年代がわかる孝養像としては日本最古の作品です。

地蔵塚古墳

(藤原町)

第6話



埼玉唯一の装飾古墳

地蔵塚古墳は七世紀後半頃の方墳で、最大の特徴は、石室の壁石に線描で様々な絵が描かれていることです。特に舟に乗り、かいを漕ぐ人物やサギの雄と思われる鳥の姿が印象的です。

これらの人物はこの石室に葬られた人物の生前の姿を描いたと考えることができます。この古墳の東にはかつて小針沼とよばれた広い沼地が古くからありました。現在の県営浄水場から小針クリーンセンター・小埼沼あたりにかけての地域です。舟で渡っているのはまさにこの沼だったと思われますし、サギはこの沼あたりで遊んでいたことでしょう。

石室は死者を埋葬する空間です。それゆえ石室内は生きている人々の世界とは異質な死後の世界、黄泉の国でした。

広々と広がる沼で、鳥が遊び、舟を出しかいで漕ぎ渡る。そうした生前の日常が、ここには描かれています。

死者の生前の楽しい日常が死後にも再現できますように、そうした祈りがこの絵には込められているのかも知れません。

水鳥出土地
(埼玉)

第7話



埴輪の水鳥

鳥の話をもう一つ。小針沼。もともと古墳時代にこの広い沼は何と呼ばれていたか記録はありませんが、ここで遊んでいたであろう水鳥を表現した埴輪がいくつもあります。最も有名なものが、埼玉古墳群内の小さな古墳から出土した水鳥の埴輪です。

どっしりとした体格に長い首、偏平なくちばしなど白鳥の特徴をよく表現しています。スーッと伸びた首に愛くるしい目の表情から全国の鳥の埴輪の中でも逸品の作品として知られています。

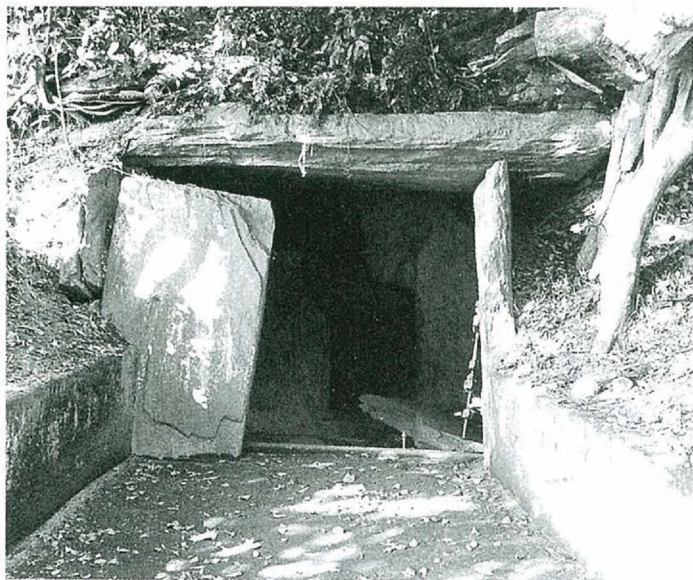
白鳥に人びとは何を求めたのでしょうか。季節になると遠い世界から渡ってくるその生命力に憧れていたのでしょうか。純白の姿に神を感じていたのでしょうか。

死者を埋葬する古墳に白鳥の埴輪を立てるのは、その強い生命力で死者の魂を呼び戻してほしいとの願いが込められていると考えられています。

この埴輪は現在、東京国立博物館に展示されていますが、さきたま資料館や郷土博物館にも複製品が展示されています。

真観寺古墳（小見）

第8話



小見真観寺古墳（国指定文化財）

秩父から運ばれた巨石

この古墳の特色は、遺体を埋葬した石室が二つ作られていることです。

墳丘上の石室は、明治一三年に発掘調査が行われ、

出土品は現在東京国立博物館が所蔵しています。

もう一つの本堂寄りの石室は、すでに江戸時代には『忍名所図会』にも描かれているように口が開いて中に出入りできたようです。

この二つの石室は、ともに緑泥片岩の大きな一枚石を組み合わせて作られており、最大の石は畳三枚分ぐらいの大きさがあります。中に入ると一枚石を組んで作られた巨大な柩ひつぎのような感じを受けます。

この緑泥片岩は秩父の長瀨あたりから取れるもので、長瀨の岩畳として残されているものと同じ石です。

七世紀代に、秩父からどんな方法でこの巨石を運んだのか。川に浮かべながら運び、さらにソリのようなものに乗せて引いたことが想像されますが、機械の無い時代ですから、その労力は想像を絶するものだったでしょう。

酒巻十四号墳 (酒巻)

第9話



発掘はすでに終了しています

たんぼの下の埴輪列

第一話で、「古墳が沈む」と題して、真名板高山古墳を紹介しましたが、同じように埋没した古墳が、利根川右岸地域の酒巻・須加地区に数多く残されています。

これらの古墳は、地盤の沈下や河川の氾濫などにより、現在の地表面から約一・五メートルほど埋没していました。そのため古墳の墳頂部がわずかに地表面から出ており、地元では平らにならして畑に使っていました。

しかし、それも昭和四〇年代の土地改良の際にブルドーザーで削平してしまい今では全く分からなくなっています。

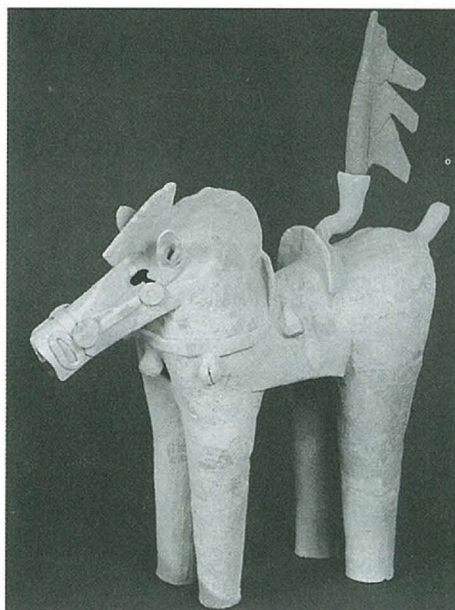
酒巻十四号墳もそうした古墳の一つで、排水路を作る工事前の発掘調査で新しく見つけられた古墳です。

たんぼの下から埴輪が列をなして発見され、それを復元していくと、日本で初めての馬の埴輪や国際色豊かな人物埴輪であることが分かってきました。

これから何回かにわたって出土した埴輪の特色についてお話ししていきます。

酒卷十四号墳 (酒卷)

第10話



旗をたててさっそつと

この馬は、鞍の後ろにパイプのような旗竿はたさきを表現しています。この旗竿にあたるものの現物は鉄でできており、蛇のように曲がりくねっているのが、蛇行状鉄器と呼ばれ、日本と朝鮮半島から二十数例出土しています。行田では埼玉古墳群の將軍山古墳から二例出土しています。

朝鮮半島では、高句麗コウリの古墳の壁画の中に、この馬と同じ状態の絵が残されています。

しかし日本では、これまでその使用状態を表現したものは何もありませんでした。

そこに出土したのがこの馬の埴輪で、日本でもこの鉄器を旗竿として使用していたことを証明する唯一のものです。

將軍山からは、蛇行状鉄器とともに馬の顔を保護する馬冑ばこも出土しています。旗竿や馬冑は中国や朝鮮半島で発達した騎兵の装備の一つで、それが日本にも伝わってきたと考えられています。

顔に馬冑を付け、背に旗を立てた馬に乗り、さっそうと走る異国風の勇姿に、当時の人々は何を感じたのか、聞いてみたい気がします。